

●司会— 周立群先生、どうもありがとうございました。続きまして、文化会セッションからは、馬場先生に報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

◆分科会報告④◆

「中国文化とアジア世界の文化共生」研究会報告

馬場毅

＜愛知大学＞

文化部会の報告をさせていただきます。文化部会は、ほかの先生方のようにパワーポイントを使いません。少しお聞き苦しい点があるかもしれませんが、ご了承ください。

文化部会は、「国家による改革・変革と社会・文化の変容」というテーマを立てました。時間的には、だいたい清代から現代までを対象にしました。清末以来の改革・変革、それに伴う社会・文化の変容について、先ほどご提起がありましたように、文化をそれ自体で考えるのではなく、文化の生まれてくる社会についても対象にしななければいけないと考えました。そして、時間軸を入れて、過去、すなわち清末から中華人民共和国成立期までと、もう1つは現在の改革開放以後の変化、それを対象として議論をしたいというのが、私たちの狙いでした。

そのうえで、まず過去の部分における議論の内容をご紹介させていただきたいと思います。

ちょうど1901年からの新政の時期（清末）における日本と中国の関係。とりわけ、新政に対する日本からの提案を、張之洞に代表される地方官僚が受容して清朝中央に働きかけました。一方、日本側が提案するというだけではなく、この時期には清朝側も多く留学生を派遣し、新政期の改革をするということに、お互いに呼応する動きがありました。しかしながら、現在、両者の間で、それが歴史の記憶としてまったく失われています。並木先生から、その問題についての提起がありました。それがまず第一報告です。

続いて、藤谷先生からは、清末の辛亥革命の時期、湖南省において、民衆が焦達峰のことを、かつて1905年の萍瀏醴起義で処刑された人物になぞらえており、民衆から見た辛亥革命と、革命派に代表されるエリートとの違いがある。そこに今までの研究において民衆から見た変革・改革の具体的内容が欠けているのではないかと指摘がありました。

それから、清末、惲毓鼎という人物が、基本的に儒学と古い道徳を堅持しながら、他方において、革命派や変法派、立憲派の機関紙を読み、欧米からの学問を受け入れています。李長莉先生は、清末の大変保守的な人物を取り上げながら、同時に、新しい学問、ならびに欧米思想の影響を受けた受容の仕方自体が、現在の改革開放以後のグローバリゼーションにおける文化の変容・受容ともかかわるのではないかと指摘されました。

スレスキー先生は、中華民国の時期の4つの問題から変容を検討されています。1番目は、政治体制、とりわけ議会制です。議会制が根付かなかったという前提のもとで、徐世昌と汪精衛（汪兆銘）という2人の人物を、文人政治家が軍人をコントロールする試みの例として比較

されています。2番目には、口語表記法に代表される文章表記の変化。3番目には纏足、辮髪  
の廃止等の風俗の変化。それから、欧米からのさまざまな新技術の普及。この4点で変容を考  
えられています。

特に、今までと異なり、例えば国民革命、ソビエト革命、抗日戦争という大きな革命の要素  
を、とりあえず一切捨象して、中華民国の時期はどのような変化が起きたのか、そして何が残  
されたのか、という提起がありました。具体的には、技術と文章表記の変化が、のちに引き継  
がれたという提起です。

馬場は、1930年代第五次圍剿戦によって国民党が勝利しますが、そこにおける蒋介石の治安、  
および保甲制などの変化が、同時に、国民政府が孫文の建国大綱に基づく国家の仕組みを改革  
し、軍事主導型に再編をしたことを報告しました。

小林先生は、県を対象にして、県の知県、あるいは民国以降の県長の分析をされました。そ  
れによりますと明・清の時代には2つの制限がかけられていました。1つは、自分の出身した  
省には任官できないこと、もう1つは最大限3年以上はられないことです。しかしながら、  
それが中華民国期に壊れてきて、その制度がだんだんおこなわれなくなりました。中華人民共  
和国になりますと、特に毛沢東時代には、基本的には外部の幹部によって県長が任命されまし  
た。しかし、改革開放以後、地元の幹部が任官され県長になりました。その結果、地元幹部と  
の癒着が起り、それが多くの腐敗を生み出しました。そういう意味では、明・清以来の官僚  
制のシステムが、県レベルで大きく変わっているという指摘がありました。

以上が、清末から中華民国期の変革、特に社会の変革の部分です。続きまして、今度は改革  
開放以後です。

張琢先生から、改革開放以後の社会科学、および人文科学の再生、変化についての報告があ  
りました。まさに、思想の開放に伴う変容という点、従来の私どもの議論ですと、エリート（精  
英）の文化の変容になるかと思えます。

周星先生は、古い町や村落の再発見の問題を取り上げられました。これが持っている意味に  
ついて提案され、従来の古いものとして解析されているのではなく、まさしく現在のグローバ  
ライゼーション、価値観の多様化するなかで、再度の文化価値の発見という視点で問題提起をさ  
れました。

陸益龍先生からは、戸籍制度の問題を取り扱った報告がありました。特に具体的な統計資料  
を用いられて、非常に積極的に議論を展開されていたと思います。戸籍制度が社会構造の基礎  
としてあり、その社会構造の変革について、時代的に3期に分けて報告されました。

続いて、松岡先生からは少数民族であるナムイ・チベット族の社会生活の変容について、実  
地調査に基づいた報告がありました。最近の市場経済化のなかで、山の上にいるナムイ・チベ  
ット族が出稼ぎのために若者は外に行ってしまうようになり、残ったのはお年寄りだけになり  
ました。しょうがないので山のふもとに行くと、そこでは漢民族がほかのところへ移動してい  
ました。そのようななかで、従来、他民族との婚姻はなかったのですが、最近では婚姻もあり、  
文化変容がおこなわれているという報告がありました。

高明潔先生は、遊牧地域独特の生産様式であるソルコの問題を取り上げられました。約 60  
年間の中華人民共和国成立期、すなわち人民公社化に見られる集団化の時期、およびそれが解  
体した時期に、中国のモンゴル族の牧民を支える生産様式、社会制度の基盤としての組織が生  
き続けたという指摘がありました。

最後に、韓敏先生から、最近毛沢東を神様として奉っているという事例についての報告がありました。従来の農民の神様として、例えば関羽などと同じ地位に奉られることで、民衆側の価値観念についての報告があり、依然として変わらない儒教的な部分と共産党の統治下で変わっていく部分と、この2つの面からの分析がありました。

以上をまとめますと、エリートの文化と民衆の文化という視点、とりわけ今まで落ちている民衆の文化という視点から、どのように対象に迫るかという方法論の提起。これがまず1つです。2つ目に、改革と文化の変容をどのように考えるかという議論がありました。3つ目に、そのなかで、現代の改革開放以後の変革、文化の変容と、過去の変容を対比して、その特色はどこにあるのかについての議論がありました。時間の関係で詳しく説明はできませんでしたが、以上がわれわれの部会報告になります。



●司会— 馬場先生、どうもありがとうございました。引き続きまして、環境セッションの報告を、榎根先生からお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

#### ◆分科会報告⑤◆

### 「現代中国とアジア世界の人口生態環境問題」研究会報告

---

榎根勇

<愛知大学>

●榎根— 榎根です。実は、この報告は藤田先生がなさる予定でしたが、急用ができて、私が務めることになりました。私はあとでもまた出ますが、決してたくさん話したいから出たわけではありません。藤田先生の事情はやむを得ない事情ですが、詳しいお話は「個人情報保護法」に触れるといけないので申し上げます。

私たちの環境グループは、ほかのグループと少しやり方が違います。環境グループは約15名です。人数が確定しているわけではありませんが、5人が愛知大学の関係者、5人が愛知大学以外の日本の研究者、それから5人ぐらいが中国からの方という構成で、よくバランスが取れ、自然科学・社会科学の方がミックスしています。

【図表1】は昨年の北京の会議のときのまとめとして、私がお渡ししたものです。環境グループの目的は環境改善技術の体系化です。これが体系化のひとつのかたちです。そのなかで、どのような研究がなされたかは個別の問題になってきます。

体系化する必要があると感じたのは、環境の研究に関しては、悠長に好きな研究をやっている時代ではないからです。中国の環境を研究するならば、中国の環境がよくならなければいけません。そのような戦略を練らないことには駄目だという立場です。